

What are you doing now ?

いまなにしている？

2024年度 共生の芸術祭

会場・京都市美術館別館 第2展示室(2階)

住所・〒606-8342 京都府京都市左京区岡崎最勝寺町13

時間・10:00—18:00 (※最終日は16時まで / 月曜休館)

2024
12 / 12 木
↓
22 日
※12/16[月]は休館

- 出展者 Artists
- 大江正彦・OE Masahiko
 - 大八木恒之・OYAGI Tsuneyuki
 - 木村康一・KIMURA Koichi
 - 清水貴久・SHIMIZU Takahisa
 - 富塚純光・TOMIZUKA Yoshimitsu
 - 長嶋柊・NAGASHIMA Tou
 - 東本恵子・HIGASHIMOTO Noriko
 - ほんまい・HONMA Mai
 - 森田博康・MORITA Hiroyasu

The Symbiosis Art Festival 2024

2024 年度 共生の芸術祭「いま、なにしてる？」

The Symbiosis Art Festival 2024 “ What are you doing now?”

出展者

大江正彦 / OE Masahiko
大八木恒之 / OYAGI Tsuneyuki
木村康一 / KIMURA Koichi
清水貴久 / SHIMIZU Takahisa
富塚純光 / TOMIZUKA Yoshimitsu
長嶋柊 / NAGASHIMA Tou
東本憲子 / HIGASHIMOTO Noriko
ほんままい / HONMA Mai
森田博康 / MORITA Hiroyasu

展覧会

会場：京都市美術館別館 2 階 第 2 展示室
住所：〒606-8342 京都府京都市左京区岡崎最勝寺町 13
会期：2024 年 12 月 12 日（木）～2024 年 12 月 22 日（木）
※月曜休館
時間：10:00-18:00（※最終日は 16:00 まで）
料金：無料

主催

きょうと障害者文化芸術推進機構
（事務局：京都府健康福祉部障害者支援課）

協力

アトリエひこ、社会福祉法人修光学園、社会福祉法人かりがね福祉会、社会福祉法人一羊会、長嶋柊作品展を応援する会、社会福祉法人ノーマライゼーション協会西淡路希望の家、特定非営利活動法人希望の園、社会福祉法人からし種の会、ザワメキサポートセンター（順不同）

展覧会企画：art space co-jin
キュレーション：高野郁乃（art space co-jin）
会場構成：tamari architects
広報デザイン：タナカタツヤ

テキスト執筆

art space co-jin：今村遼佑（IR）、小川俊一（OS）、川上桂（KK）、高野郁乃（TI）、寺岡海（TK）

お問合せ

art space co-jin

art space co-jin（きょうと障害者文化芸術推進機構 事務局）
〒602-0853 京都市上京区河原町通荒神口上ル宮垣町 83 レ・フレール 1 階
Tel & Fax: 050-1110-7655
Mail: info@co-jin.jp | WEB: https://co-jin.jp/

ごあいさつ

時計の針はいつも「今」を指し、その前後には過去と未来があります。時計の針が、ぐるりと回っ

て戻ってきたとしても、そこに 1 つとして同じ「今」はなく、私たちは常に新しい「今」と

出会い続けています。

本展覧会は「いま、なにしてる？」と題し、京都府内外の 9 名の障害のある方々の表現を紹介致します。彼ら彼女らもあなたも私も、この瞬間も「今」と出会い、そこで何かをしています。

例えば、今あなたはこの文章を読んでいて、私はこの文章を書いています。大江正彦は黄色

の絵の具をパレットにたっぷりと出しているところかもしれません。大八木恒之は日当たり

の良い自室でオイルパステルを塗り重ねているかもしれないし、ほんままいは移動中のバス

から鳥を眺めて次回作の構想を練っているかもしれません。森田博康は服を破り明日の準備

をしているかもしれないし、東本憲子はプチプチに色鮮やかな点を落とし、木村康一は新た

な妖怪を生み出すために粘土を握っているかもしれません。長嶋柊は丁寧な日記を描き終え、

富塚純光は新しい物語を語り始め、清水貴久は人知れず手描きの値札シールをこっそりとな

にかに貼り付けているかもしれません。

こうして想像を膨らませていくと、世界中すべての人が「今」と出会い続けているというこ

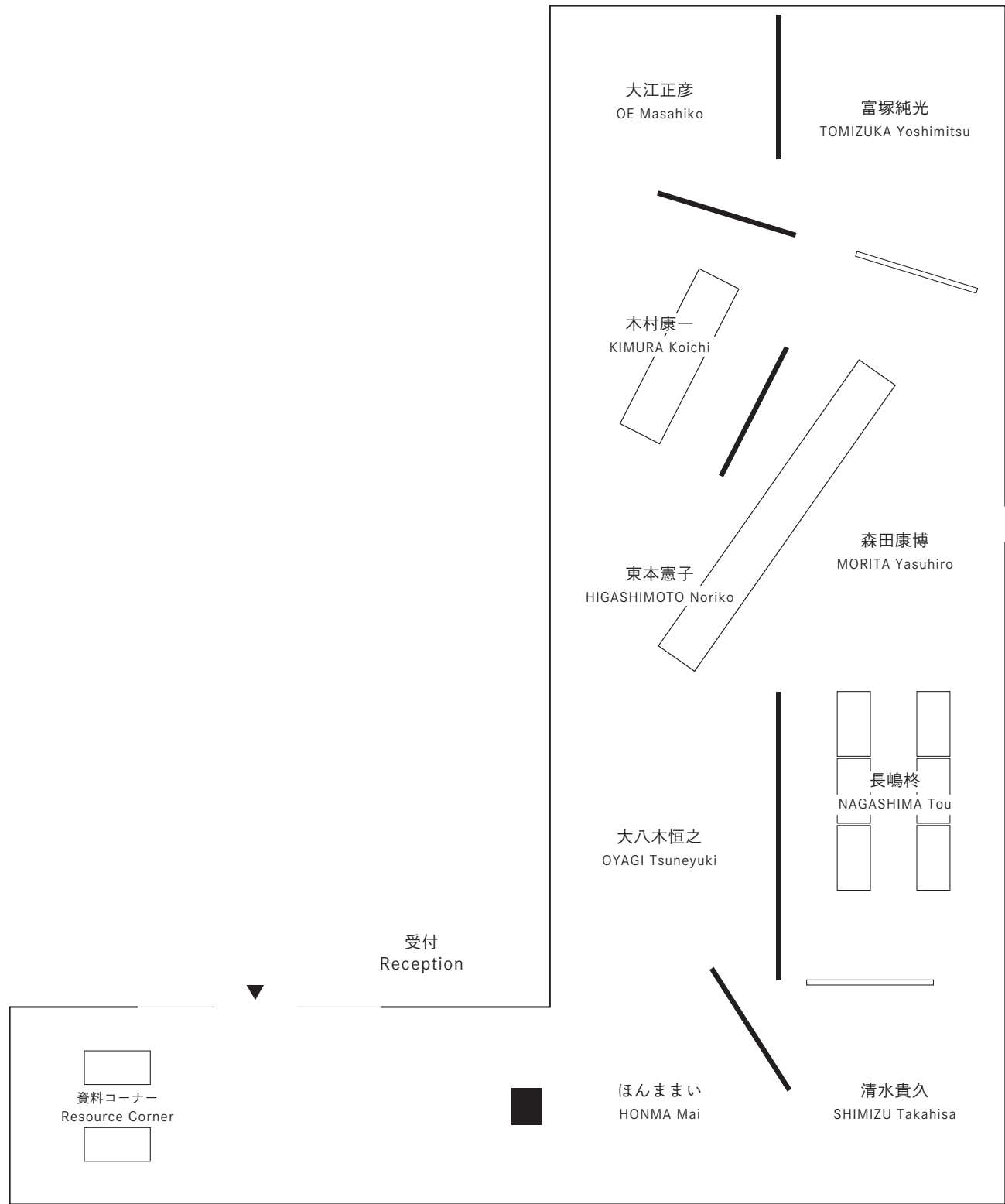
とに辿りつきます。その想像は途方もないものではありませんが、小さな想いを育んでいくこと、

それは同じ世界を共に生きていくことへの希望のようなものではないかと考えています。

最後になりましたが、本展覧会にご協力いただきました各作家の皆様、並びにご親族、各施設、

関係者の皆様に謹んでお礼申し上げます。

本展覧会企画者



会場配置図

富塚純光 TOMIZUKA Yoshimitsu

1958 年生まれ

兵庫県在住

所属：社会福祉法人一羊会 あとりえずかけ



富塚純光《馬鹿受け青春、丸かじり英雄（ヒーロー）物語
～下手な運動パーティー & 医者の話～》

落ち着いたよく通る声で、富塚純光は彼の物語を語りながら絵を描く。小さな筆に墨汁をたっぷりとかきまぜて、目の前の紙に文字を描いていく。ポツリポツリと落とされた文字は散りばめられ、文章としては読めない。物語を語り終え、墨汁での下絵が出来上がると、次はパステルを手にとり文字の隙間を鮮やかに彩り、富塚の物語は完成する。

それらの物語は彼自身の記憶を基にしている。以前は記憶に忠実に日記のような形で、幼少期に観たアニメや本、働いていた会社での出来事などを綴るばかりだった。（現在でも、日記として事実をそのまま描くこともあり、その場合は多少の脱線をしつつも細部まで描写をする。）19 年ほど前から記憶の物語の中に、少しずつ独自のフィクションを織り交ぜていくようになった。現在では登場する人物や団体名などは記憶に基づいてはいるものの、その内容はほとんどフィクションとなっている。富塚は日頃から「記憶のメモ絵」を描き溜め、自室の壁に貼り、記憶から始まる新たな物語を想像しているそうだ。

そんな富塚が創り出す物語は自身が主人公になっているものが多く、《馬鹿受け青春丸かじり英雄（ヒーロー）物語 下手な運動パーティー & 医者の話》や《ドッキリおとぎ話物語メドレー とんちんかんおどけ話》など、その内容は、突飛でコミカルな展開に大いに笑いありの、喜劇的なものばかりだ。1958 年に生まれた富塚の幼少期や青春時代が実際にはどうであったか、仕事をしていた時は寄り道などすることなく同じ日々を淡々と繰り返していたそうだ。幼少期は周りからの言葉や振る舞いに傷つくこともあったという。決して明るいばかりではない過去の記憶も富塚の中には確かにあるはずだが、創り出す物語がユーモアに溢れるものばかりであることは、富塚なりの過去の自分への慈しみと慰労であり、はなむけのようなものなのではないだろうか。きっと今も富塚は記憶を探り空想し、豊かな物語をたっぷりとかきまぜて蓄えていることだろう。



大江正彦《黄色》

大江正彦 OE Masahiko

1965 年生まれ、大阪府在住
アトリエひこ

1965 年、大江正彦はダウン症と重い心臓疾患を伴い生まれました。8 歳で心臓手術を受けるまでは、少ししか歩くことが出来なかった大江を、どこに行くにも母親がおぶっていたそう。その為に絵を描くことは、じっと座っていても楽しめることのひとつとして、生活の一部となっていた。大江にとっての「描く」はキャンバスへスケッチブックへ新聞紙へと、多岐にわたる。キャンバスに向かう時には、アクリル絵の具をパレットにたっぷり出して凄まじい速度で筆を走らせていく。2023 年 1 月 14 日、大江のアクリル画は大きく変わった。それまで 30 年描いてきた動物の絵から一転し、画面いっぱいの黄色い色面の中央に丸が描かれていた。突如始まった「黄色シリーズ」に、いったいこの丸は何かと尋ねても大江からは「きいろ」との答えが返ってくるだけだった。スケッチブックにはマーカーで、出かけた場所の見取り図やアニメキャラクターなどを描く。食卓でテレビを見ながら、夕飯が出来るのを待ちつつ、何度も色を重ね、原型が見えなくなっているページや、黙々と塗りつぶしたページ、時にはマーカーを分解して中に水を注ぎ、新鮮な描き味を味わったであろうページなど、楽しむための貪欲な工夫と形跡が見られる。新聞紙に描く行為は、養護学校卒業後に自宅にて始まった。当初は新聞の一文字一文字をボールペンでなぞっていたが、次第に斜線でリズムカルに文字を消していくようになった。その営みは、現在でも自室の勉強机で日課として続いている。大江は幼い頃より描くことを続けてきた。そんな息子に母・昌子は好きな絵を思う存分に描かせてやりたいと、大江 26 歳の時、亀岡市にあるみずのき寮（現・みずのき）で開かれていた絵画教室へ片道 2 時間以上かけて通い始めた。そして母は奔走し、1994 年に大江の愛称である「ひこくん」から名前をつけた「アトリエひこ」を開設した。出生時には長くは生きられないと告げられた大江は 59 歳となった。「きいろ」を描くようになり、さらに気力旺盛のようだ。アトリエひこで、自宅で、今日も描くことを続けている。

(TI)



ほんままい《耳を澄ますインコ》

ほんままい HONMA Mai

1984 年生まれ
三重県在住
特定非営利法人希望の園

負けず嫌いなほんままいは、常に良い絵を描きたいと願っている。パレットに色鮮やかな絵の具を置いて、左手に絵筆をにぎり、キャンバスに顔がひつつきそうなほど近づき、力強く確実に仕上げていく。ほんまは、生まれながらの脳原生運動機能障害でいわゆる肢体不自由であるため、その身体は彼女のコントロールのままに容易に動くものではない。

21 年前、19 歳の時から通い始めた希望の園へ平日は毎日通所し、絵を描き続けている。油絵を描いている時の集中力は凄まじく、没入しすぎ体力の消耗が激しいため油絵の制作を連日は行わず、1 日おきにパステル画の制作を行っている。だからと言って、パステルを握っている日が休憩というわけではなく、ほんまはパステル画の制作も力を抜かない。筆跡が際立つ油絵のタッチとは異なり、パステルでの制作は線を幾度にも重ねることにより、独特の躍動感と立体感が生まれている。ほんまの制作について、希望の園の村林真哉園長は「彼女は毎日毎日がリセットされている。毎日が新しいから、飽きることなく新鮮に絵を描き続けることができる。」と語っており、ほんまは常に絵を描くことに前向きなのだという。自然豊かなロケーションに建つ希望の園へは、送迎バスで通所しており、その移動中のバスから、外の景色を眺めてはモチーフとなる鳥を観察し、アトリエでも鳥の図鑑を眺め、ほんまの作品と言えば「鳥」と言えるほどに鳥に夢中だ。しかし、完成した作品のタイトルに鳥の名前をそのままつけることはあまりせず、例えば「にじのなかをおよぐ」や「鳩のつぶやき」「イチャイチャする鳥たち」など、作品の力強さをふんわりと包み込むように優しく詩的なタイトルをつける。そんなほんまの作品は、2024 年の春に第 74 回みえ県展にて 739 点の作品が集まる中、障害の有無にかかわらずに最優秀賞を受賞した。負けず嫌いなほんまの努力が実り、良い絵を描きたいと願う彼女の、願いが 1 つ羽ばたいた出来事だった。

(TI)



清水貴久《タイトル不明》| 撮影：風の工房

ペットボトルが置かれている。私たちがよく目にする日常の光景である。しかし、注意深く目を向けると、そこに貼られた値札のシールが、全て手描きで丁寧に描かれていることに気づき、その光景は一変する。

作者である清水貴久が、この自作の値札シールを貼るようになったのは、2013 年ごろである。当時は、通所の際にコンビニでお茶やお菓子などを購入して施設へ向かうことが慣例だったという。ところが時代の流れで、商品の管理がバーコードで行われるようになり、それまであった値札シールは貼られなくなっていった。それを補うように清水のこの行為は人知れず始まったと思われる。飲食が終わったものは自身できちんと分別して捨てていたため、その行為の始まりに気づく人はいなかった。しかし、ある時にスタッフの一人がその光景に違和感を覚え、行為に気づいて以来、こっそりとその自作の値札シールが貼られた商品を保管するようになった。また、清水が施設で制作している絵画も興味深い。色鉛筆と鉛筆を使用して描かれる作品は、一枚を仕上げるために数ヶ月から 1 年ほどかけてゆっくりと、緻密に描かれる。制作工程は、まず初めに鉛筆で画面全ての陰影を描写し、その次に色鉛筆で着色を施し、最後に白色の色鉛筆で全体を覆うという工程を経て完成する。画面中央の矩形の中に主題となるモチーフを描き、周囲にそれを彩る額縁のような彩色が施されることも特徴である。全ての作品に、制作した日付とサインがきちんと描かれていることや、絵が思うように描けず、何度も色を重ねる内に紙が破れるまで描き続けてしまうことがあるというエピソードからも清水が自身のルーティンを大切にしていることが窺える。

自作の値札シールを貼る行為は、誰に見せるためでもなく、続けられている。それは、この世界の中で、清水が自分自身の時間を生きるために必要な営みであるのかもしれない。誰もが見過ごしてしまうようなこの世界の小さなほころびを、清水は人知れずそっと正してくれているのではないか、この値札を見ているとそんな想像に浸ってしまう。

(TK)

清水貴久 SHIMIZU Takahisa

1985 年生まれ、長野県在住
社会福祉法人かりがね福社会 風の工房



撮影：柳沢明夫

森田博康 MORITA Hiroyasu

1963 年生まれ、長野県在住
社会福祉法人からし種の会 緑の牧場学園

福祉の現場で問題行動とされている「破衣行為」(※1)だが、森田博康は夜な夜な自室にて、その破衣行為を行い、翌朝、破いた服を纏い登場する。破衣行為を行う人は多く存在するが、破れた衣類を纏い独自のファッションにしてしまう森田の行為に、ときめくものを感じた施設職員が、2017 年に長野県で開催されている障害のある方々の公募展「ザワメキアート展」に応募してみたところ入選。その行為は表現として認知された。表現とはいえ、やはりその行為には福祉の現場での困りごともある。どんなに分厚い生地 of 服でも、森田は爪だけを使い器用に破る。服としての機能を失うまでに破れたものを着用させておくわけにはいかないため、担当の支援員は常に新しい服を購入し続けなければならない。2022 年の記録ではトップス・インナー・ボトムス・靴下を合わせ年間で 378 着も購入したそう

だ。そもそもなぜ服を破るのか。担当職員は、森田が新しい服を着用した時や、破れた服で登場した時に、周囲の人たちから声をかけられコミュニケーションが生まれていることに喜びを感じているのではないかと推測し、翌年 2023 年から、トップスのみキャラクターがプリントされたものや派手な色合いのものなど、なるべく目を惹く服を選んで購入するようにした。その結果、2022 年には 161 着購入していたトップスは、2023 年は 92 着の購入に留まった。何よりも、担当の支援員はそれらの服を「森田さんが好きそうな服」と言い、森田を想い吟味し購入しており、森田はそれらの服を気に入って着用しているそう

だ。服を破り纏う、この行為を問題行動とするか表現とするか、そんな議論はさておき、森田は服を通じて他者と少し違う自分を創造し、その自分を周囲に受け入れてもらう。そんな日々を純粋に楽しんでいるようだ。それは、私たち誰しもが程度の差こそあれ当たり前に持ち合わせている承認欲求と呼べるものの現れともとれ、今ここに自分がいるということ、その尊い現実を私たちに伝えてくれているのではないだろうか。

※1：破衣行為とは一般的に、強度行動障害と呼ばれる行動障害の一種で服を破ってしまうことを指す。

(TI)

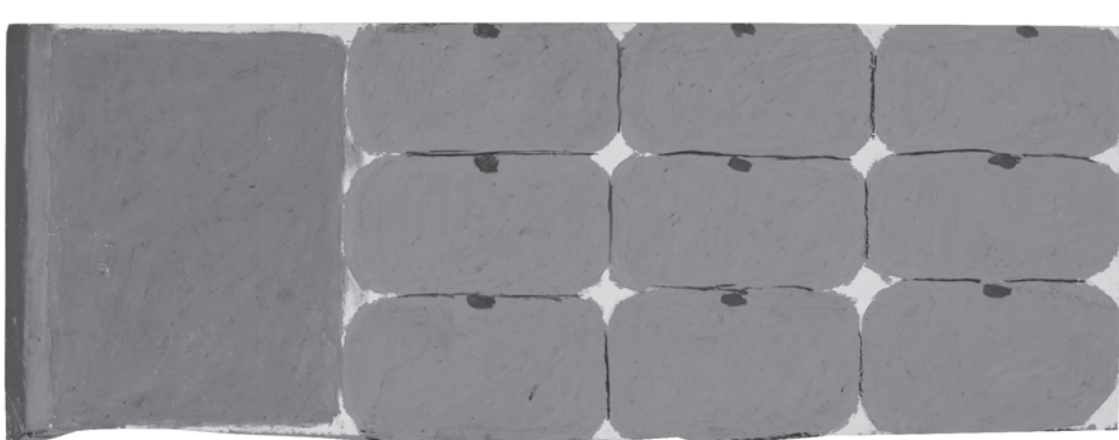


木村康一 《タイトル不明》

木村康一は器用に指先を使い、つまんだり押したりしながら慣れた手つきで粘土を造形していく。細かい箇所には竹べらを用いて穴を開け、溝を掘って手足の指を作ったりしながら作業は流れるように進められ、迷いがあるようには見えない。みるみるうちに木村の手から不思議な生き物が生み出されていく。ユーモラスで可愛らしくもある一方で、人体の一部がかたどられているためか生々しくもあり、どこか毒もある。木村はそれらを妖怪だという。

木村が妖怪に興味を持つようになったきっかけは、小学 5 年生の頃にテレビでみた「ゲゲゲの鬼太郎」のアニメだった。最初はアニメにでてくるキャラクターを真似して描くことから始まり、そのうちにオリジナルの妖怪を描くようになる。陶芸を始めたのは養護学校を卒業後に修光学園に通うようになった 18 歳の頃からで、初期には仏像や龍なども作っており、現在よりも大きなサイズのものが多かった。

平日の半日は修光学園にて粘土で制作し、家では今もほぼ毎日、気が向いた時に絵を描いている。消しゴムは使わず、一気に描き上げるため線が力強い。紙はすべて B5 サイズが使われており、その大きさにはこだわりがあるようだ。A4 サイズやもう少し大きな紙を渡してみたこともあったが、小さく切って描いたという。もともとは現在の絵と比べてもう少し単純なものを描いていたが、2010 年代の後半頃から複雑なものになってきた。描かれた妖怪の横にその名前が書かれている場合もあり、何が描かれているのかがより理解できる。それを見ると例えば「ほそいくびあしいっぽんよつめ」などのように手足や目鼻などとその数による名称に加えて、幽霊や鬼、神様（「おにかみさま」と書かれているものもある）といった人智を超えた存在、または、馬や鳥、猿などの動物との融合、ギリシャ、インド、アフリカといった国や地域の属性があることが分かり、非常に興味深い。陶器の作品一つ一つにも木村独自の設定があることが推測される。



大八木恒之 《みかんと味噌》

大八木恒之 OYAGI Tsuneyuki

1976 年生まれ、京都府在住
社会福祉法人修光学園 飛鳥井ワークセンター

大八木恒之は普段、通所する飛鳥井ワークセンターで、野菜・果物の袋詰めや珈琲豆を選別する仕事をしており、休み時間にはスタッフとのコミュニケーションも楽しむ。ワークセンターが販売する自家焙煎珈琲のパッケージに作品を採用されたこともあるが、もっぱら仕事としてではなく、自宅で自分が楽しむために描いていることが多いようだ。

絵を描きたいから描く、というシンプルな情熱は、彼が 5 歳の頃に芽生えたものだ。ある日、『遠山の金さん』を描いてほしいと母にねだったが、自分で描いてみたら？と言われた。その日からオイルパステルを握り、絵を描く楽しさに目覚めたのか、誰に学ぶことなく 40 年以上も制作を続けている。

今までに描いた作品は通算 1,000 点を超えるが、作品は適宜整理をし、自宅で管理できる量に抑えられており、今回はその中から 140 点を、調査と展示のために借用した。

大八木作品の特徴として、陰影のない平面的な描き方と奥行きのない空間表現があげられる。そう書くと平坦なイラストを想像するかもしれないが、実物を見ればわかる通り、オイルパステルの厚みと濃厚な色彩によって密度の高い画面となっている。ネギの絵であれば、遠目からは画面いっぱいの緑の色面として映るだろう。箱詰めされたネギを真上から覗き込んだような構図に加え、画面左側のネギの間に境界線に輪郭のような黒い線がある以外は、影も光も絵の中に存在しない。

だが画面に近づいて見ると、さらに緑色の中には黒や青、赤色の点や線が走っており、故意か偶然かは不明だが、一色を塗りつぶしただけではない複雑な色味となっていること気づく。加えて、厚みを持ったパステルの筆跡が紙の上に僅かに陰影をもたらしており、静的なモチーフの中に作者の手の動きを留めている所も見どころだろう。

2002 年 11 月 18 日、幼稚園年少の 3 歳から長嶋柊の絵日記創作がはじまった。

以来今日まで継続しているこの創作活動は、本展会期中には 249 冊目に達し、これまでに書いた総数は約 8000 ページに及ぶ。

始まった頃は鉛筆を握ることさえも困難で、文字や絵も書けなかった。この時期の日記では識別できる絵や文字は母や父のもので、本人が書いたものは形にならない点や線、薄く塗ったクーピーなどに限られている。

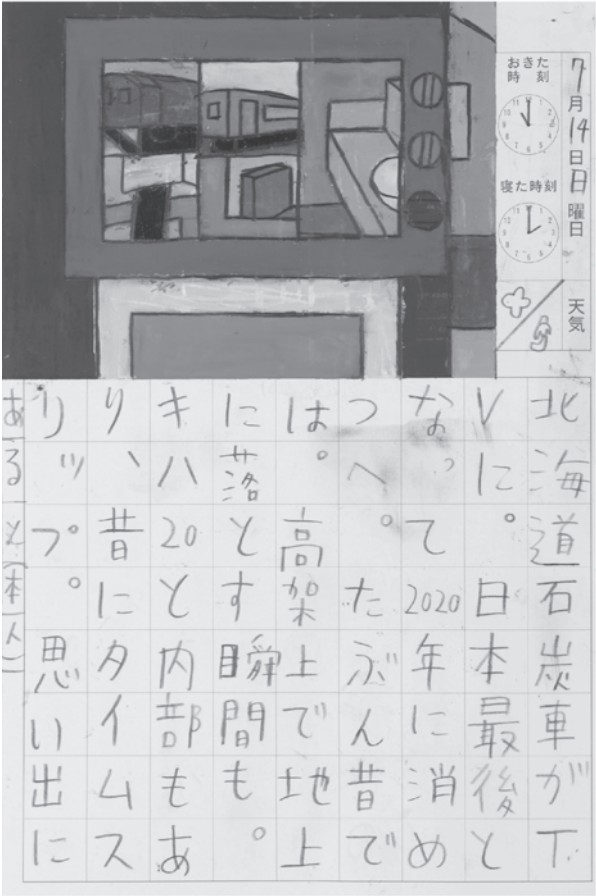
それでも鉛筆をもつ手を家族が握って一緒に書くことを続けた。画材も書きやすさや色味などが試行され、次第に母が書いた下絵に色をのせることができるようになり、淡く薄かった色彩にも力強さが加わった。やがて一人で書けるまでのスキルを習得し、同画面上にクローズアップや他のアングルなどが分割して描かれるなど、表現の幅を広げていく。

創作の工程はまずテーマを決めることに始まる。鉛筆で下絵を描き、次に 72 マスの文字欄に簡潔な文章を綴る。収まらない時にはマス目を追加し、難しい漢字はネットで調べる。絵の周りにマスキングを施して隙間なく着色した後、もう一度鉛筆で輪郭線を描き加え、マスキングを剥がす。ここからは母が絵の部分のトレーシングペーパーで保護し、写真撮影のあとブログに投稿すると、もうすっかり明日になった今日という日が終わる。幼稚園の先生とのやりとりであった絵日記は、ブログという新たなメディアにより広大な世界に開かれた。

長嶋は日々さまざまな場所に赴いて物に触れる体験を重ね、写真に納め、ネットなどを駆使して探究する。信号や電球などの照明器具、スピーカーや火災報知器、男性トイレの小便器、噴水、電車や飛行機、自転車カバー、定礎板に至る造詣の深さは底知れない。そしてそれらを独自の視点で擬人化や抽象化し、もう一つの日常である日記帳の中で絵や文字に還元していく。

絵日記が今日まで継続するとは思ひもしなかった、と母。
今夜も自身とその家族の想いを抱いたページが彩られるのだろう。

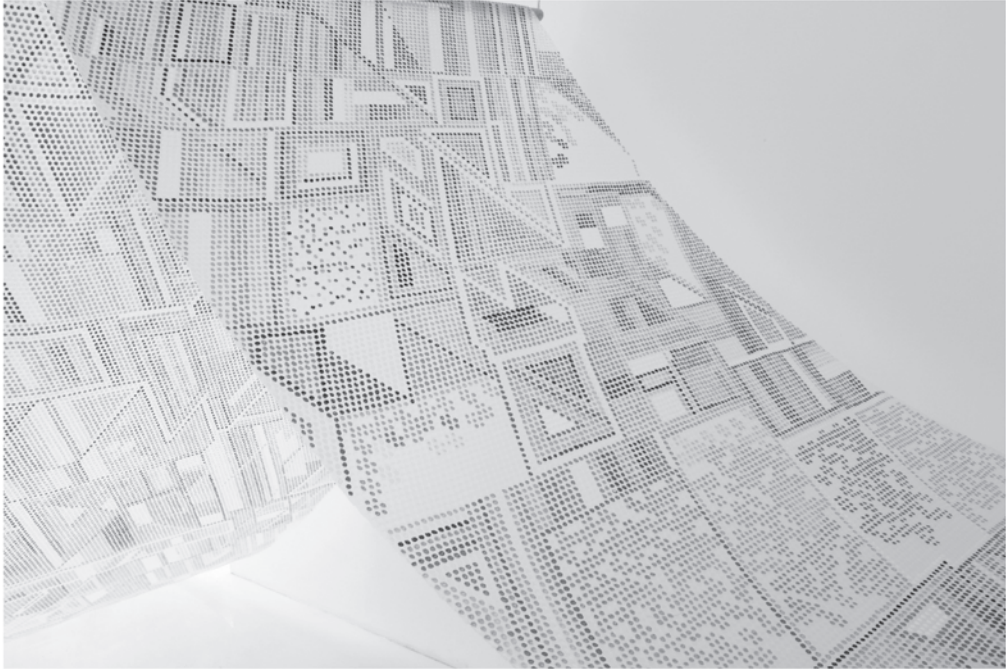
(OS)



長嶋 柊 《日記：2024 年 7 月 14 日》

長嶋 柊 NAGASHIMA Tou

1998 年生まれ
京都市在住



東本 憲子 《無題》
撮影：宮島 径 | 画像提供：ポコラート全国公募展 vol.6

東本 憲子 HIGASHIMOTO Noriko

1983 年生まれ、大阪府在住
所属：社会福祉法人ノーマライゼーション協会 西淡路希望の家

大阪市にある西淡路希望の家に通所する東本憲子は、通称プチプチと呼ばれる気泡緩衝材に絵を描いている。当初はキャンバスなどにアクリル絵具を用いて、自身のお気に入りのキャラクターなどを描いていたが、それらの支持体の準備がなかった際に施設のスタッフが、これに描いてみる？と提案したのが、プチプチとの出会いだった。

東本の制作は、主に油性マジックを使用し、気泡の裏側にできた円形を一つ一つ丁寧に色づけていくことで行われる。一色ずつペンを持ち替えながら、繰り返して描かれる点は線になり、様々な形を作りながらカラフルな幾何学模様でロールを満たしていく。一見すると、ランダムに構成された色面にも見えるが、注意深く見てみると、その中には花や花火などの東本が好むモチーフが描かれていることも見てとれる。それらは東本の日常の中の思い出がモチーフとなっていることが多いという。

月 3 日ほど、1 日 2 時間程度の制作時間を積み重ね、最初に手がけたロールは 6 年ほどの時間をかけて完成を迎えた。その次に制作されたものは 3 年ほどと、次第に制作のスピードは早くなっている。とはいえ、一つ一つ緻密に塗りつぶしていく工程に変わりはない。ロールは長いもので横幅が 1.2 メートル、長さが 40 メートルほどあり、気泡は横列に 100 個程度、1 センチ間隔で並んでいることを考えると、単純計算で 400,000 個ほどの円を塗っていることになり、そこに費やされた途方もない時間を想像することができる。

視察に伺った際、プチプチに塗られた色が透けて、テーブルがカラフルに彩られていることを、彼女は嬉しそうに教えてくれた。それは塗り分けられた色の数だけ、彼女の喜びに満ちた時間がそこにあったと感じさせてくれるには十分だった。

(TK)